虚像【女の追憶】

蒼城雪紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚像【女の追憶】

【Ｎコード】

Ｎ５３４０Ｐ

【作者名】

蒼城雪紫

【あらすじ】

お互いを想いすぎてすれ違ってしまった男女の話の女視点。

（前書き）

悲恋・死ネタで、狂愛にも取れる内容です。苦手な方はご注意ください。

今日も当たり前のようにお日様はのぼっている。当たり前のように光を放っている。こんな日はどうしても、日向ぼっこをしたくなってしまう。でも、こんなに天気がいいならお布団も干してしまった方がいいかもしれない。そんなことを思いながら、私はお日様の光を浴びていた。あの人はまだ寝ているはず。なら、もう少しのんびりしていても大丈夫。

この地にやってきてから、私はお日様を眺めることが多くなった。父の後を継いであの人の専属の医者になって。屋敷であの人を診察しているときは何かと慌ただしい日々を送っていた。あの人専属といっても、あの人が不治の病とわかるまでは城下で一般の人たちの診察もしていたし。わかってからも何かと忙しかった。

――――　けれど、ここでの暮らしは、ここでの時間は、私とあの人だけのもの。何かと時間に余裕ができて、私は気がつけば空を見上げるようになっていた。空を見上げ、お日様を見つめるようになっていた。いつしか私は『お日様はあの人のようだ』と思うようになった。

私にとって、あの人はお日様だった。手の届かないところにいて、いつも輝いている。温かくて。放っているその光は、どこか優しい感じがする。あの人の微笑みはまるでお日様の光みたいだ。いつのまにかお日様も好きになっていた。

気がつくと、貴方は私の隣に座っていた。まだ寝ているものだと思っていたから、私は思わず慌ててしまう。そもそも、この人はちゃんと寝て、安静にしていなくてはいけない。

「無理なさらないでください！　ただでさえ貴方様は体力が衰えて

いるというのに……」
「大丈夫だ。寝てばかりでは、さすがにつまらない」
そう言って、貴方はいつもみたいにふわりと優しい笑みを浮かべる。どんな人にでも向ける、その眩しいほどの微笑み。でも、その微笑みはどこか憂いをおびていて。まるで私に心配をかけないようにするような、そんなものに見えてしまう。他人に迷惑をかけないように自分を偽ったり、自分の本当の気持ちを隠そうとするのも、この人の悪い癖だ。
私はなんだか悲しくなって、また空を見上げた。
「お前はなぜいつも空を見ているのだ？」
貴方はふと、そんなことを訊ねた。
「……お日様の光が、好きだからです。お日様の光は、すごく優しい感じがするから」
お日様の光は、お日様の光が届くところにいる人なら、どんな人でも浴びることができる。貴方のその微笑みだって、貴方の近くにいる人間なら向けられるもの。どんなに暖かい光でも、どんなに優しい微笑みでも。それは決して、私だけのものじゃない。お日様は、確かに空で輝いているのに。確かにそこにあるはずなのに。どんなに手を伸ばしても届かない。そんなこと、出会った頃からわかっていたはずだった。
――――　それなのに、私は貴方を愛してしまった。
貴方の優しさに触れて。その微笑みを向けられて。私は、貴方とは釣り合うことのない、身分の低い、ただの医者だったのに。決して、貴方は振り向いてくれるはずもないというのに。
私が貴方に恋したことが運命なら、結ばれないことすら、運命の一

部だったのだと思う。だって、お父様が医者でなかったら、私とあなたは出会うことすらできなかったのだから。私が貴方と出会えたのは、お父様が貴方の診察を昔から請け負っていたから。お父様が、医者だったから。

私が貴方と出会えるのは、貴方が病に倒れた時だけだった。小さな頃は、貴方に会えることが嬉しくて、城に行くときはいつもはしゃいでいた。でも、成長するにつれ、気がついたのだ。私が貴方と出会える喜びを感じている時、貴方が病に苦しんでいることを。

―――　私の幸せは、貴方の苦しみの上で成り立っていることを。

時が経ち、お父様が亡くなり、私はお父様の仕事を継いだ。それでも、私と貴方の関係は変わらなかった。貴方が病にならなければ、私は貴方に会えなかった。わかっているのに、貴方と会えることに喜んでしまっている自分が憎かった。

だから、貴方が不治の病に侵されたとわかったとき、私は私の人生全てを使って貴方に尽くすことを決めた。私が貴方を幸せにすることができないとしても、せめて一日でも長く貴方が生きられるように。

そして私は、貴方が長く生きるための最善の方法として、貴方にこの地で暮らすことを提案した。空気の綺麗なところで療養していれば、多少は症状が和らぐと聞いたことがあった。それに、貴方のかかった不治の病は他人に伝染する可能性のあるもの。屋敷ではなく、できるだけ人と接触のないように暮らすことも必要だった。それを聞いた貴方は、私の提案を聞き入れてくれた。

ここで二人で暮らし始めて、どれくらいが経つのだろうか。貴方の病の症状は軽くなることはないけれど、悪化することはなかった。けれど、貴方は時折、悲しそうな表情を見せる。憂いを帯びた微笑みとは、また違う。何か愛しいものを見るような、優しい瞳。けれど、やはり悲しそうなのだ。

―――　そう、今見せているその表情。

「……どうか、なされたのですか？」

何故、今日の私はその一言を口にしたのだろう。今まで口にしたくてもできなかった、その言葉を。貴方はそれに、少しだけ困ったような笑みを浮かべた。

「なんでもない。気にするな」

「いえ、今の表情はなんでもないような感じでした。何を考えておられたのですか？」

「……教えなくてはいけないか？」

「教えてほしいから、聞いたのです。聞かない方がよろしいのなら、いいですが……」

聞きたかった。貴方がそんな表情をする理由を。でも、私はその理由をなんとなくわかっていたのかもしれない。その時、私は耳を塞ぎたいような気分だったから。

「……この世で一番愛しく想う人のことを、考えていた」

聞きたくなかった。だって、貴方とその愛しい人を引き離したのは他でもない私のはずだから。私が貴方をこの地に連れてこなければ、もしかしたら貴方は貴方の愛しい人といられたかもしれないのに。私だけが、貴方とのこの地での生活で至福を感じていた。

やはり、私の幸せは貴方の苦しみの上に成り立っていることには、変わりなかったのだ。それを償うために、この地で貴方のために尽くすと決めたはずなのに。罪悪感が胸を締め付ける。謝りたくて、謝りたくて。でも、あまりに胸が苦しくて。謝罪の言葉は口にすることができなかった。

「そうですか……貴方様に想われている方なのですから、とても素敵な方なのでしょうね」

それなのに、私の唇は別の言葉を紡いでいく。その言葉は、皮肉か嫌味のように自分には聞こえた。私は、貴方に想われている人に嫉妬してしまっているのだと思う。そんな自分が、嫌で嫌でしょうがなかった。

「あぁ、この世で一番美しい女性だ。その姿も、心も」
「本当にその方のことを想っていらっしゃるのですね」
「だが、幸せにはしてやれていない」
「貴方様のような素敵な方にそれだけ想われているだけで、その方は幸せだと思います」
「はたして、そうなのだろうか」
「少なくとも、私はそう思います」

もし、私が貴方に想われていたとすれば、私はそれだけで本当に幸せになれる。それだけで、心が満たされる。たとえ、この想いが許されないものだとわかっていても、貴方も私と同じ想いを持ってくれているというだけで十分。

でも、そんなことはあるはずはない。だって、貴方には愛している人がいるのでしょう？　表情を見ればわかる。貴方がどれくらいその人を想っているのか。その表情は、決して私には向けられないもの。その表情を目の前にしていないとしても、貴方にそんな表情をしてもらえるその人のことが羨ましくてしょうがない。

―――　憎たらしくて、しょうがなかった。

＊　＊　＊

いつもと変わらないはずの、とある夜。私は水を入れた桶を持って、あの人の部屋に向かっていた。桶の中には手拭いも入れてある。歩くたびに桶の中の水がはねて、チャプチャプと音が響く。

あの人に飲んでもらっている薬は副作用が強いものだ。だから薬を飲んだ後、あの人はひどい苦痛に耐えることになる。特に寝ている時、あの人は苦しみのあまり、額に汗をかきながら唸っている。私は毎晩、そんなあの人の傍にいて、汗をこの手拭いで拭くことしかできない。医者といっても、あの人の生きられる日をのばすためにさらなる苦痛を与えてしまっているのが、ひどくもどかしかった。

『私は私の人生全てを使って貴方に尽くすことを決めた』

そんな偉そうなことを言っておいて、結局、私はあの人を助けることができない。苦しみを与えているだけで、あの人がいつか死んでしまうことには変わりがない。それに、たとえ少しでも長く生き続けたとしても、あの人には苦しみしかない。それでも、生きてほしいと思うのは我儘なのでしょうか。そう疑問に思っても、あの人自身に聞くことはできなかった。

あの人の部屋につくと、戸の前で一度あの人の名を呼ぶ。けれど、返事はなかった。寝てしまったのだろうか、それとも聞こえなかっただけだろうか。私はもう一度名を呼びながら、戸を開けた。目の前の光景に驚き、思わず手に持っていた桶を落としてしまった。桶が落ちた音と、水音があたりに響き、貴方は私の方を振り向いた。貴方の右手には貴方の小太刀が握られていて、貴方はそれを自分に向けていた。

――――　自害しようとしているようにしか見えなかった。

「何を、なさっているんですか……ッ！」

私は貴方に駆け寄り、小太刀を握っているその手を掴んだ。その手は、どこか震えているように感じた。きっと、今まで寝込んでいたから、身体がうまく動かないのだと思った。それと、薬の副作用。この人が飲んでいる薬には、手が震えてしまう副作用もあったはずだ。

「怪我でもなさったらどうするのですか！　とにかく、早く刀をおさめてください！」

私は、貴方に死んでほしくなかった。どこかに逝ってほしくなかった。ただ、それだけだった。だから、私が貴方を幸せにできないとしても、一日でも長く生きてほしかった。

「これ以上貴方様が傷ついたら、私……」

貴方が不治の病の発作で苦しんでいることは知っている。血を吐きながら、せき込む姿を何度も見ているから。薬の副作用で身体の痛みに苦しんでいることも知っている。夜中、痛みに苦しみ、唸っている貴方を何度も見ているから。貴方が心身共に疲れ果て、傷ついているのはわかっていた。だから、自分を自分で殺すためとは言っても、貴方にはこれ以上傷ついて欲しくなかった。

私は、いつのまにか泣いていた。私の涙はぽたぽたと、貴方の布団を濡らしていく。何をしているんだろう、私は。泣きたいくらい苦しんでいるのは、目の前にいるこの人なのに。

ふと、貴方は私の名を呼ぶ。私は俯いていた顔をあげ、貴方を見た。

「お前に頼みがある」

「頼み、ですか……？」

「あぁ」

そう言って、貴方は私に小太刀を差し出した。その行動に、私は思わず目を見開いてしまう。それでも、貴方の言いたいことは、なんとなく理解してしまっていた。貴方も、私の様子を見てそれは気付いているはず。でも、貴方はあえてそれを口にした。

「私を、殺してくれ」

この言葉をいつか聞くことになることを、私はどこかで気づいていたと思う。だって、私は気付いていたのだろうから。それでも、気付かないふりをしていたのだと思う。

――― 貴方が、死を望んでいることを。

「このまま生きていていても死んでいるのと同じだ。なら、いっそこの苦痛から解放されたい」

いつまでも続く発作。決して回復することのない、不治の病。伝染するかもしれない、と愛しい人と会うことはできない日々。弱り果てた貴方の身体。薬で命を繋ぐ日々。皮肉にも、貴方の命を繋ぐその薬は副作用が強く、さらなる苦痛を貴方に与えている。それらから解放されたいと思うのは、自然なこと。

――― 貴方をそれらに縛りつけていたのは他の誰でもでもない、私だ。

生きてほしいと願うあまり、貴方に与える苦しみのことをちっとも考えていなかった。それに気づいたのは、つい最近。貴方が生き続けていても、苦しみしかないことに気づいていたのに、私は私の我儘で貴方を生かしていた。

『それでも、生きてほしいと思うのは我儘なのでしょうか』

そう、ただの我儘だった。貴方が死を望んでいることを、私は気付いていたのだから。私は、最低な女だ。

――― 貴方と一緒にいたいから、自分のために、貴方を生かしていた。
私の貴方への想いは叶うことがない。だから私はせめて、貴方と一緒にいることで自分を満足させていた。貴方の気持など考えもせずに。本当に、最低な女だ。

「もうしわけ……申し訳、ありません……っ」

気がつけば、私は謝っていた。謝ったところで、私のやってきたことは決して消えたりしないのに。私の罪は消えないのに。それでも、私は涙を流しながら謝っていた。

「何故、謝る。謝らねばならないのは私の方だ」
「違う……違うのです！」

貴方が謝る必要なんて、ない。全ては私がいけなかった。そもそも、貴方はこの地に来ることを望んではいなかったのかもしれないのに。それでも、私はそれしか手段がないように思わせていただけかもしれない。だから、貴方は私とこの地に来たのかもしれない。それなら、それも私の罪。
こんな私でも、貴方のためにできることは何なのだろう。それは、すぐにわかった。貴方の望みをかなえてあげること。貴方を苦しみから解放してあげること。
――― この手で、貴方を殺してあげること。
私は、貴方から小太刀を受け取り、それを握る。私が貴方に最後にできることは、私ができる罪滅ぼしは、これしかない。きっと、貴方が死んだことがわかれば多くの人が悲しむ。だって、貴方はどんな人にも愛されていたから。私は、その人たちに恨まれるかもしれない。でも、その恨みを背負うことはまた、私の罪滅ぼしの一つ。
私はこの身が朽ち果てるまでこの地に居続けよう。貴方と二人き

りで過ごしたこの場所で、追憶に溺れ、悲しみに暮れ、その罪に苦しむ。その苦しみは貴方の苦しみよりはずっと軽いのかもしれないけれど、貴方がいなくなった後にできるのは、それくらいしかない。

私のこの想いがなければ、貴方は幸せになれたのかもしれない。不治の病であったとしても、もっと違う道があったかもしれない。ならやはり、貴方の幸せを壊したのは私。

もし生まれ変わることがあるなら、私は絶対に貴方を想うことはしなくない。だって、貴方を想えば私は貴方を不幸せにするだけだから。だからどうか、来世では貴方と出会うことがありませんように。来世では貴方が幸せになれますように。

――――　私は、貴方に刀を向けた。

貴方の小太刀が貴方に突き刺さる瞬間、私は貴方に聞こえないような小さな声で自分の気持ちを伝えていた。伝えて何になるのだろう。自分に問いかけながらも、勝手に私の口はその言葉を紡いでいたのだった。

「貴方様を、愛しておりました。」

（後書き）

他サイトに掲載したことのある作品なので、読んだことのある方もいる、かもしれない、ですね……。この作品の時代は具体的には決めていませんが、戦国～幕末の武士のいた時代をイメージしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5340p/

虚像【女の追憶】

2010年12月16日22時30分発行